

招待席

木村 曙

きむら あげほの 小説家 1872.3.3 - 1890.10.19 兵庫県に生まれる。明治開化期の著名な牛鍋屋「いろは」当主の娘で東京高等女学校を卒業後、十六歳で母とともに「いろは」の一店を経営の傍ら小説に筆を染め明治二十二年(1889)「読売新聞」に処女作『婦女の鑑』を連載し、相次いで四編を書きながら十八歳のうら若さを惜しまれ病没した。掲載作は、雅俗折衷の一見人情本の筆致ながら、男に捧げる女の操でなく、妻と、夫が結婚前の愛人との信実かけた操という拵えに、海外留学を願って洋風開化思想に志あった「女史」曙の個性が突起していて、さらなる再評価が期待される。

## 操(みさを)くらべ

春 心ありて風のにはほはす梅のそのまづ鶯の問はずやあるべき

香り来る、花のたよりに皆人の、はるばると問ふ梅の園、いづれおとらぬにぎはひに、人の心も興ずめり、茲(こゝ)八都に程近き、亀井戸村に其名さへ、老松(おいまつ)と聴(きこ)へたる、みやび造りの料理店(みせ)、離れ座敷の庭先に、あじろのかきをやりちがへ、思はせぶりなかくれみの、しよんぼりと立つ枝折戸(しをりど)ぎは、いく千代かけてちぎりけん、こけむす石の燈籠に、障子のなき八あかしをバ、ともさぬ物と覚えられぬ、漸(やゝ)暮れかゝる夕まぐれ、いづれよりか入(い)りたりけん、くるひながらに庭先を、あらす小犬の声きゝつけ、

《あれ又ぶちが

と声高(こわだか)に、叱れどどこか愛らしき、声音(こわね)と共にあく障子火影(ほかげ)にほんのり二人の姿、

あれ御らうじましあのすばしい事ハ

《セツかく楽しく遊んでゐるもの捨(すて)て置いてやればよいに  
《ほんにさうで御座りましたな  
と云(いふ)と諸共(もろとも)見かはす顔、ぱツというざす薄もみぢ、  
《ほんに私八うかうかと戴きすぎたと見えかつかと致してまゐりました  
《まだそんなに呑(のみ)もせずと……どれも一ツついでもらはう  
と猪口(ちよく)さし出(いだ)す手をおさへ  
《若旦那様あなたその様(やう)にめし上ツても宜(よろ)しう御座いますか  
《まだ二合にも足らぬ酒別に障りになりもしまい  
《お障りにさへなりませずバなんぼめし上りましても宜しう御座いますが…  
…もし若旦那様あなた八なんぞお心にすまぬ事でも出来ましたかお顔色と云ひ  
いつになくおすごしになる御様子と云ひどうも不審でなりませぬとてもお力に  
なれるきづかひ八御座りませぬがおかまいなくバお氣晴しにどうぞおきかせ下  
さいませぬか  
と問へども何(なん)の答へもなく、腕こまねきて思案のさま、一(ひ)としほ、  
心さわがれて  
《もしお聴かせなされて八被下(くだされ)ませぬか  
とひざ進ませて一心に、まもりつめたる有様を、見るに此方(こなた)もあはれ  
に思ひ、  
《其様(そのやう)に血相かへて聴く程の事でもない大層らしく考へ込んでつ  
ひ云はなかつたのがわかるかつた実八今日ぎりおまへに八音信(おとづれ)をたつ  
も知れぬ故(ゆゑ)心計(ばか)りのいとまごひをしに來たからそれをつひ云ひ出  
し兼ねてふさいだのさ……実にいま迄八あとさきも考へぬ事をしてをツてそれ  
が為めおまへに迄氣の毒な思ひをしなければならぬのもみんな自身のつゝし  
みのないからの事是だけ八只(たゞ)平あやまりにあやまるより外(ほか)八ない  
腹も立(た)ふが心中(しんちゆう)を察してゆるして下さい  
と聴てはツと八思へども、元より其身(そのみ)のいたづらから、かくなりゆき  
しことなれば、今更何と悔(く)ゆるともかへらぬ事とかれこれを、恨みつらみ  
で彼(か)の人の、心を悪(あ)しくせん事八、好ましからずと心をなほし、  
《大ていおさツし申ましたそれ八何よりおめでたい事共にお祝ひ申まする  
と云ひし計(ばか)りに其後(そののち)八、さすがに迫る胸の中(うち)、察し八  
すれどなまじいに、やさしき言(ことば)かけもせば、却(かへツ)て後(のち)の  
思ひをバ、ましもやせんと糸みをつくり、  
《そう事もなげに云ふて呉(くれ)ればわしも何より心嬉しい此事さへ云ふて  
しまへバもう氣にかゝる事八ないもう日もたつぷりと暮れた様子一(ひ)とまづ  
帰る事としませう  
《一とまづならばまたいつかお出での時をたのしみに待くらしもいたしませ

うが只今お別れ申上ればお目にもかゝれず私もお目にかゝらうとも存じませぬ故(ゆゑ).....

とあと八何やら口の中(うち)、思はぬ罪を作りしと、心に詫びて立上り、

《サアも何も云ふて呉れるなもうわし八帰るから

とそろへし下駄をはきかけしが、さすがふびんと振廻(ふりかへ)れば、此方(こなた)も同じ園の梅、にほはす風にさそはれて我を忘れてきなく驚。

夏 こゑ八せで身のみ焦す螢こそいふよりまさる思ひなるらん

夏の夜(よ)の、月八さえてもさえやらぬ、心の中(うち)のもやくやを、たれに語らんすべもなく只うつうつとねやの中(うち)、漸(やゝ)消え残る燈(ともしび)を、かい立(たて)ながらくりかへす、文字八定かに見えねども、をりをりよする眉ぎはの、波に憂(う)しと八知られたり、よそをはゞかる口の中(うち)

《心ならぬ此(この)書状.....我夫(わがつま)が御容体(ごようだい)如何(いか)に渡らせ玉ふにやをさなき頃より親々が云ひなづけして二人(ふたあり)の、成人日(ひとゝなるひ)を楽しみて互に障りなき様にと、心に心つけ玉ひし、其の甲斐さへもあなうれし、来(きた)る五月(さつき)の始めに八、めでとう縁を組ませんと、のたまひたりし其の日より、一(ひ)ト日(ひ)をまつ八千秋の思ひ八同じくおはさんなれば、わづかな病にさへぎられ、伉儷(かうれい)の期を延ばせよと、のたまふ事八よもあらし、さすれば手足もきかぬまで、いたうやみつき玉ひしか、若(も)しさもあらバ舅姑御(しうとご)が、来(こ)よと迎(むかひ)の御文(おんふみ)もあるべきものをさもなき八、親しくしてもどこやらに、隔て心のある故か.....否々(いないな)、諸事に拙(つた)なき妾(わらは)より、彼方をしたふ心根に、引くらべし八心のおごり、よくよく思(おもひ)めぐらせバ、身八片田舎に人となり父の導き母様(はゝさま)の、教によりてやうやうと、女子(をなご)の道八知る物の、才拙くて夫(それ)さへも、全(まつた)ふ八をさめ得ず彼方(かなた)八都に育ち玉ひ、見聞(みきゝ)も広く其上に、まだ年若くましませど、才ある故に人々に持離(もてはや)され玉(たまふ)と八、都にゆきしひとの言(ことば)、何一つとて彼(か)の人に、ふさはしからぬ妾(わらは)をバ、いつ迄思ひ居玉ふべき、若しやこ度(たび)の御病氣八、いつわりにて八あらざるか、妾(わらは)をいとひ玉ひての、延期とあらバ其様(そのやう)に、あから様にのたまふともはしなく恨み八なさぬもの、いつそ父上母公(はゝさま)に、こひて今より都へ行き、事の様子を問ひ申て、しぎによつて八我心定めんものかさるにても、此身ばかりが云ひしとて、舅姑御(しうとご)のやすやすと、うけがひ八したまはじ、こ八如何(いかゞ)してよからんと、さすがをとめの

一とすぢに夫のことをおもひつめ末八みだるゝをだまきの、いとも果敢(はか)なきことどもを、思ひまはず無理ならぬ、となりの室(へや)にふし居たる、侍女のお玉八かくぞとも、こゝろ付かねバ真夜中頃、ふと目を醒(さま)し、坐敷の火影(ほかげ)に驚かされ、早(はや)夜明しかとあたりを見れど、窓よりさし入る日影もなし、さて八又もや嬢君(ひめぎみ)の、思ひにくしてろくろくに、いねも得やらず居玉ふなるか、かくて八終(つひ)に御身の上に、恙(つゝが)もあらんさりとして八、おそばをまもる我身の不かく、まづともかくも心をバ、なぐさめ申あげなんと、主(しゆう)を思ひのたのもしく、そと起上りてきぬをかへ、しはぶきすれば座敷に八、ひろげし文をおし隠し、ありあふ草紙(さうし)取り上げて、余念もなげに打眺めぬ、お玉八襖おしひらき、ていちやうに手をつきて、

《こ八嬢君(ひめぎみ)に八、まだいね玉はではおはせしか、かく真夜中過迄も、いね玉はで八御身の為めに、必らず悪(あ)しふ候ぞ、父母公(ぎみ)の見玉はゞ、又如何様(いかやう)に案じ玉はん思(おぼ)しめし煩(わづら)はさるゝ事も、さはにて八おはさんなれど、何ごととも父母公の、御計(おほか)らひにまかし玉ひて、一人きなきなおぼされな、嬢君(ひめぎみ)のむづかり玉ひて八、妾(わらは)迄が心ぐるしく、かなしふおぼえ候ぞ、努(ゆめ)思ひ煩らひ玉ひそ、夜(よ)あくる迄八一と休み、やすみ玉ふひまもあり、まづいね玉へよとかたへなる、みだれ箱をバ引寄(ひきよす)れば、嬢(ひめ)八是非なく立上り、衣(きぬ)かゆるさへ力なく、猶ももつるゝ乱れ髪、心の中(うち)になでつけて、

《どふぞ母公(ぎみ)へ、今夜の事八お耳へ入れず置きてたべ、卿(おんみ)のまめやかなる言葉にて、早(はや)胸八とけたれば心安ふいねてよと、きぬ打(うち)かづけバ安堵なし、

《さらバおやすみあれかし、  
と言(ことば)を跡におのが室(へや)、下(さが)りしあと八しんとして、早一と言も声八せで、思ひに身をば、こがすほたる火。

**秋** 風さわぎむら雲まよふ夕にもわするゝまなくわすられぬ君

いつしかに、萩の下露ぬれ初(そ)めて、楽しくすだく鈴虫の、宿をあらしてあともなき、野分(のわけ)の朝の心地しつ、恋する人をまつ虫の、音(ね)にのみなけど甲斐もなく、思ひますほの篠すゝき、互のきゞくかはらずとも、此の世の縁(えにし)きりぎりす、はかなき身ぞといたづらに、人を思ひに身もやせて、力なくなくよりかゝる、れんじのそとに影しげく、松の木(こ)の間(ま)をもる

月も、心と共におぼろなり、折柄さつとふく風に、つれて聞ゆる人声八しのびやかなる男の声、我名をよぶ八心得ずと、よくよく聴(きけ)バこ八いかに、朝夕恋ひし其人の、茲(こゝ)に我身のあるぞとも知るよしなきにおとのふ八、心のまよひさもなくバ、狐狸のわざなるか、それがあらぬかと計(ばか)りに、ためらふ処へ案内(あない)もなく、入(い)り来し人の顔見るより、あつと計(ばか)りの打驚(うちおどろ)き、二た足三足タヂタヂと、物さへ云はで引下(ひきさが)り、どつとすわりて茫然たり、此方(こなた)八さこそと近くより、

《あゝよく茲(こゝ)にあて呉れたな、  
と云はれて始めて己(おのれ)にかへり、

《あゝよく茲迄.....

と取纏(とりすが)らんと為(な)したがるが、何思ひけん形をあらため、

《どふしてあなた八此処(このところ)へ、お尋ねなされて下さりました、日頃噂に聴(きい)た程の、見上げたお心と八思はれませぬ、お別れ申す其(その)をりに、再びお目にかゝらうと八存じませぬと申したを、無下(むげ)にお聴(きゝ)下さりましたか、一旦賤(いや)しいはしためを、つとめて八をりましたれど、心迄が其通り、賤(いや)しうなり八致しませぬ、か様に申上ましたら、何(なん)ぞや是迄受けました、御恩を忘れてしまふたかと、おいかりも御座りませうが、あの時受けた御恩の程八、たとへ如何(いか)なる事があつても、決して忘れ八いたしませぬ、わすれねバこそ此様(このやう)に、むきつ気(け)にも申まする、.....お腹を立て下さりますな、.....もし若旦那様、どうぞ今夜八此(この)まゝに、他(ほか)へやどりをお取り遊ばし、あすにもならバ一時(いちじ)も早く、東京へお帰り下さいまし、私(わたく)しの身に取りまして八、其方がどの様に、うれしい事が知れませぬ、.....逐立(おひたて)る様で八御座りますが、かうして二人御一所(ごいつしよ)に、入(いり)まじらずにをる事八、心がどうもすみませぬどうぞどうぞと、涙ながら、畳に顔をすり付けて、たのみつわびつひたすらに、帰るをうながす心の気(け)なげさ、こなた八いたく恥入りて、

《若し御身(おんみ)にて非(あ)らざりせば、我身八くさりはてなんに、よくぞいけんを為(な)し呉れし、礼をのぶべき時もあらん、今日も此(この)まゝ別れんと、云ふかと思れば忽(たちま)ちに、姿八見えず成りしかバ、今は人目もいとふべき、声をかぎりにつり立て、

《数ならぬ身をあく迄に、なさをかけて玉はる事有難しともゝつたいなしとも、心に八一日(ひとひ)とて、忘れし時八なき物を、たまたま尋ね玉八りし、お礼も申さず過分なる、異見立(いけんたて)せしはしたなさ、うわべ八何気(なにげ)なき様に、おほせられても心に八、嘸(さぞ)恩義をも知らぬぞと、さげすみ玉ひし事ならん、切なき情(なさけ)を打捨(うちすて)て、つれなく云ふもお身の上、大事と思ふ一(ひ)とすぢより、.....他(ほか)に心八候八ず、ゆるし

玉へ、

と、斗(ばか)りにて、わつと斗(ばか)りになき立つる、声きゝつけて此家(このや)の老婆、

《もしもし、夢でもごらんなされたか、……ひどくないで御座る様子、……お湯を一つめし上れと、

ゆり起されて目をひらき、

《有難う存じます、……何だか妙な夢を見ました故(ゆゑ)それでないたので御座いませう、

と体(てい)よく前八つくるへど、つくろひ兼(かね)る我が胸八、常に思(おもひ)の満ち満ちて、わするゝ間なくわすられぬ君、

冬 あげまきにながき契をむすびこめおなじところによりも合はさん

山辺にも、野辺にも敷くやしろがねの、実(げ)にうるはしき雪気色いとゞ眺めも広庭の、池に遊びて愛らしき、おしのつがひのそれよりも、猶睦まじき若夫婦

《実に月雪花ともてはやす程有りて、美(うる)はしき眺(ながめ)ならずや、

《屋敷とちがひ、此処八、となれる家もはべらねバ、又一しほに候ぞかし、

《あれ見よ、寒さ知らぬかあの様に、楽しく遊びて居る事八……それぞれ、道太郎八いづれへ行きしか、見せなバ定めてよろこぶならん、

《道太郎八米事(よねごと)が、さきの頃に鳥見せんとて、離れの方(かた)へつれゆきはべりき、

云ひつゝあたり見廻して、夫のそばに膝すりよせ、

《いつぞや夫(つま)のおほせも候ひしまゝに、今日(けふ)米(よね)をよびよせて、嫁入の事を進め候ひしが、一向に受引(うけひき)申さず、さまざまにまをせし処、操を破ぶるをおそれと迄、申出(まをしいで)候ひし故(ゆゑ)、妾(わらは)も強ふるに強(しひ)兼ねて、其(その)まゝにもだし侍りぬ、

と聴(きい)て此方(こなた)八何思ひけん、ハ一とゝいきをつきしかど、妻八是に心付かずや、再び、小声に言(ことば)をつぎ

《彼事(あれ)八下婢(はしため)にも似ず、心まめやかに見えしまゝ、老松(おいまつ)とやらん云ふ料理店(れうりや)より、主人(あるじ)に乞ひて連れまゐりしが、妾(わらは)が見しにたがはずして、心まめなるのみならず、よみかきの道も暗からで、女子(をなご)の道にも総(すべ)て通じ、通常(なみひとゝほり)の教をバ、受けし者すらおさおさに、及ばぬ程にて侍るなれば、道太郎を守らするに八、誠に心安う候程に、永々(ながなが)妾(わらは)が手許にさしお

きたく、……いつぞや夫(つま)に八、若(も)し嫁入の義を否(いや)と云はバ、  
ひま取らせよとのたまひしなれどそ八夫(つま)のお言(ことば)とも覚えはべら  
ず、まげて彼八留め置き玉はれかし、

《左迄(さまで)卿(おんみ)の心になほひしならば、心まかせに為(な)し玉へ、

《それにて安堵なしはべり、

余念もあらず兩人が語らひありし次の間に、ひそかにむせぶ女の声、聴くに不  
審と立上り、襖の方(かた)へとあゆみ行くを、夫(をツと)八何かあわたゞしく、

《雪……雪

夫の声の耳に入(い)らずや、雪子八襖おし開けバ、外に八お米(よね)が正体な  
く、声も涙にひれふして、まるぶが如く室(へや)に入(い)り、

《もし旦那様、……、道夫様、私(わた)し八奥様へ、お顔向(むけ)がなりま  
せぬ、

《さ云ふ八奥が我等の事を、……

《御存じあつてのお取計(とりはか)らひ、

と聴て今更面目も、ハツと計(ばかり)にさしうつむき更に言(ことば)も無かり  
けり、お米八少しく頭を上げ、

《去る七月の廿五日天満宮のお帰りがけ奥様が老松へお寄り遊ばした其(そ  
れ)なりに私事(わたくしこと)八病気の為め体の労(つか)れに二階八廻らず座  
敷をあづかつて居りましたがあなた様のお内方(うちかた)と八存じもよらずお  
給事に出たが御縁と思ひの外(ほか)あとにて聴けバあのをりに次の室(へや)に  
てほうばい衆(しゆ)が私(わたく)しの病(やまひ)に付きもつたいないあなた様  
のお噂を申(まをし)たとやらそれをバお聴(き)遊ばして不びんとおぼしての  
お計(はか)らひ有(あり)がたすぎてお恨(う)らめしいそれと知ツたらどの様に  
どなたがお進め遊バそうとも一旦誓ふた言(ことば)に向ひ決して動き八いたし  
ませぬ物……上ツて調度三日目にあなた様にお目どほりいたしました時の其苦  
(そのくるし)さ直(すぐ)におひまを願ふて八奥様のおぼしめし如何(いかゞ)と  
思ふたも浅どひ考へ一日二日とのびる中(うち)奥様八何やかと新参の様にもな  
くお目をかけて下さりますし道太郎様八追々と米(よね)よ米よとおなつき遊ば  
し恩と愛とに引かされてようおいとまも願ひませなんだ……

《あゝこれ米(よね)妾(わらは)が知らぬ顔せし八悪(あし)かれとてに八あら  
ぬぞかし夫(つま)のおためそなたの為め我(わが)心から引(ひき)くらべて思ひ  
過ぎた妾(わらは)があやまり底意ありての事に八あらねバ夫(つま)にも必ら  
ず妾(わらは)をバさげすみて玉ふな

とさかしけれどもどこやらが、まだおぼこげにきこゆる八、年のゆかぬ故(ゆ  
ゑ)なるべし、道夫八たれし顔を上(あげ)

《左迄(さまで)事実を知りながら只の一度もみぶりをバ見せぬもみんな卿(お

んみ)がたしなみ何条我が下(さげ)すむべき我こそ八如何様(いかやう)に心くさりししれ者と云ひけなさるゝも是非なきに卿等(おんみら)二人の赤心(まごゝろ)より人にも知られで過ぎし事礼のぶるべき様(やう)もなし過ぎ来(こ)し事八わびもせん此後共(このゝちとも)に我(わが)道夫を追々大事を取るに付け保佐をたのむ八妻なるぞ只(たゞ)をしき八米(よね)が身の上かゝる貞婦を只一人.....

《是もかくなる約定(やくじやう)にや.....ア妾(わらは)さへあらくバ.....

《左様な事八露程もおぼし召(めし)て下さりますな.....勿体ない様で八御座りますが私(わたくし)八道太郎様があの様にしとふて被下(くだされ)ます故に我子(わがこ)の様に思はれましておひとゝなり遊ばすを待遠しう存じまする... ..勝手がましい申分ながらぶてうはふも御座りませうがあなたの御成長遊バす迄おそバにお置き下さりませ

《そなたさへよきならバ道太郎が事八云ふ迄ものう妾(わらは)が為めのかたうでに一生つとめて玉へかし  
語るなかバへ道太郎、乳母(うば)におはれて室(へや)に来(きた)り、三人の顔をかはるがはる、見つゝしきりに笑みつくり、雪子の方(かた)に身をのり出せば、雪子八是をいだきとり、あやせバわらふ愛らしさに、三人八いつか憂き事も、とけて楽しきあげまきの、いとより長き契(ちぎり)をバ、むすびこめたるいもとせに、つながる縁(えん)の主従(しゆうじゆう)が、心の程や如何(いか)ならん、

初出: 『読売新聞』明 22・10・6、7、8